

Title	『赤都心史』ノート
Author	松浦, 恆雄
Citation	人文研究. 37 卷 3 号, p.169-183.
Issue Date	1985
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	西野貞治教授・宮田一郎教授退任記念号

Placed on: Osaka City University Repository

『赤都心史』ノート

松 浦 恒 雄

1

瞿秋白は、モスクワでの活動を開始するのと殆ど同時に『赤都心史』を書き始めている。その第一章「黎明」が書かれたのは、1921年2月16日のことである。当時、『餓郷紀程』が未だ書き終えられていなかったことを思いあわせれば、瞿秋白の胸中には、夙に『餓郷紀程』と対になるべき『赤都心史』の構想が用意されていたと考えることができよう。

瞿秋白はしばしば、「序言」（或いは「緒言」）において、何故その文章が書かれねばならなかったのかの内的必然性を象徴的手法を駆使しつつ展開しているが、『赤都心史』もその例に漏れない⁽¹⁾。

瞿秋白は、個人をとりまく環境を映し出す心の鏡とその影響をあらわす心の鐘との比喻でもって、人と外界とのかかわりの個別性を説明しようとしている。個別性を産むに至る外因の純客観性を認めた上で、「世間の不平等性」を強調するのである。それゆえにこそ、瞿秋白の心の鏡と鐘にも、無上の価値が備わる。「世間の不平等性」の「永存不滅」を説く彼に、少々の気負いのあるのは否めないが、そのやや難渋な言葉使いにも、言葉を自己の思想で染め上げようとする表現への激しい情熱の火を感じずにはおれない。

瞿秋白は、『赤都心史』が「この赤色のモスクワで聞き、見、思い、感じたこと」の集成であると述べているが、大切なのは、それらの文字を書くよう盛り上がってきた瞿秋白自身の「心理」の動きにあるのである。彼がこの宇宙に痕迹としてでも留めたいと思っていたのは、このうそいつわりのない彼の「心理」なのであった。ソヴェト・ロシアというこの世に初めて誕生した社会主義国家の草創期に生活したことの証しというよりは、「何とか人生を理解しようと努めた印象」の書として、瞿秋白は自らの「心理」をさらけ出す決意をしていたのである。

そのため、前書『餓郷紀程』とはいささかその様式を異にしている。例えば、時事については『晨报』の「モスクワ通信」、「ロシア革命の歴史的観察や制度の解釈について」は『ロシア革命論』⁽²⁾ という具合に、明確なる執筆

活動の分業を行なっているのである。『赤都心史』は、客観的立場を要請されぬ、瞿秋白の個性、感受を十分に発揮し得るものに執筆対象を絞って書き継がれたものだと考えていい。『赤都心史』にあらわれた時事などについても、その内側にくるまれた彼なりの思い入れを想定すべきなのである。

表題『赤都心史』の「赤都」は、「赤色新国の都城」であるモスクワを意味するが、「心史」は、「東方の若者は、この赤都における心の影、心の響きの史詩を綴る」のだという含意に出ずるものであろう。心の史詩というからには、「凡そ描写の意に満つる所は、いくらか散文詩の気味がある」のも頷ける。『赤都心史』は、「個性を突出させ、自己の思潮を印刻」しようとの意欲に満ちた「著者の幼稚な文学習作」であると考えてさしつかえない。瞿秋白は何よりも「読者が相当深い感想を得んことを望んで」いたのである。

2

『赤都心史』は、瞿秋白自身の分類に従えば、「雑記、散文詩、『逸事』、読書録、参観遊覧記」或いは「社会の実際生活、参観遊談、読書体験、冥想感得」と区分し得るわけだが、今は大きく「社会の実際生活」、「散文詩」、「冥想感得」の三類に分かっておこう。

その内容は、瞿秋白が肺病に倒れるあたりから（1921年7月）、大きく変化をみせている。前半部は「社会の実際生活」の章が多く、後半部は「冥想感得」の章が多いのである。こうした瞿秋白の筆墨の濃淡に留意しつつ、『赤都心史』一年有余の瞿秋白の跡をたどることで、彼の活きた姿に肉迫してみたい。

『赤都心史』全49章中⁽³⁾、第一章「黎明」は、他章といささか趣を異にするように思われる。巻頭に据えられたこの一章により、瞿秋白はモスクワに向う自己の基本姿勢をさりげなく表明してみせているように思われるのである。

「黎明」は、払暁の明けきらぬ暗がりに、新旧交代の過渡期を暗示しつつ、新しい芸術の勃興を書きとめることに充てられている。

だが、その新しい芸術に対して、瞿秋白はただ困惑を覚えるばかりであった。瞿秋白は、未来派詩人マヤコフスキーの詩の表面的な特徴については分析してみせているが、詩の内容自身は「読んでもわからない」のである。未来主義の演劇も、全ての古い規律を捨て去り、「また理解できない」だけで

あった。

ところが、ポリショイ劇場で演ぜられた旧歌劇は、その凋落が著しいとは言え、「妙にして荘麗なる建築芸術は全て完全に保存されている」と感じるのである。瞿秋白は、しこのための「赤味を帯びた黒い霞の影」は、却って「黄昏近き夕陽に如かない！」と、新旧両芸術から受けた素直な感想を述べる。だが、そのあと、瞿秋白はこう締め括るのである。

「危難窮迫し、饑餓、寒さ、戦禍、疫病に呻く赤都には、文化の星の輝きがあまりに乏しい。しかし、新旧二つの流れは平行して緩やかに流れており、光輝やく未来を静かに待つことができる。」⁽⁴⁾

これは確かにロシアの新興芸術に対する瞿秋白の態度、しかもいささか片寄った視点からの態度を表明していることに間違いない。瞿秋白が新旧両者の眼前における優劣を度外視し得た理由の一つには、確かにわからぬながらも、そこに孕まれている生命力の充溢を感じとっていたことがあろう。例えば、未来派の絵画が彼に与えた刺激に満ちた印象、爆発的な活力、躍動する生命感などがそれである。だが、一方で、「いつも皆のために光明の道を切り拓こうと思って」⁽⁵⁾いた瞿秋白が、モスクワの全てを受け入れ、その中から「新」の萌芽を発見し、「光明」の灯として中国にもたらそうと考えていたことの心理的作用も小さくはあるまい。「本当に赤色のロシアに身を浸してこそ、現実の世界の湧き来るのが見えるのである」という心理である。瞿秋白にとって、自身をも含む中国を離れたモスクワという存在は、あり得ぬものだった。それゆえ、それは、自身の心のどこかに巣喰っている「余計者」意識に対する激しい否定欲でもあったはずだ。

本章は、「黎明」なる象徴的題名からも、芸術の「黎明」ばかりでなく、少なくともその背景に、新国家の「黎明」をみてとることは可能であろう。書き出しの仮空の風景描写やそれに続く文化芸術と経済との関係に素描を加えた一段などに、瞿秋白の「赤都」に向う際の基本的観点を読みこみ得る含蓄の深さがひめられているように思えるのである。

さて、旅装を解いた瞿秋白たちの活動は、クロボトキンの葬儀の取材に始まり、次いで、教育人民委員会委員長ルナチャルスキーへの会見と続く。以下、瞿秋白は、クロンシタットの乱、国家職員の生活、無産階級文化部の音楽会またその会長の言、ギリシア正教の儀式、それに参列するモスクワ市民、その市民の袖を引く乞食たちと公私の両面から事細かに「社会の実際生活」をうつしとってゆこうとする。モスクワの「社会の魂」を浮かび上がらせん

がため、丁寧にその背景を埋めているという印象がある。

だが、注意深く同時期の文章を見較べてみれば、『赤都心史』と『晨報』の「モスクワ通信」欄などの使い分けには、単なる文章の題材や内容ばかりではない瞿秋白の思いが読みとれるのである。

まず、ロシア共産党第十回大会（3月8日～16日）について触れておこう。周知の如く、本大会では「戦時共産主義」に代わる新経済政策などが採択されていたのであるが、瞿秋白は、この重大な政策転換について、『赤都心史』の中で正面からは取りあげていないのである。

とは言え、瞿秋白がその党大会に全く注意を払っていなかったわけではなかった。逆に、極めて精力的にその大会を取材し、「共産主義之人間化」と題する「モスクワ通信」を全文約三万字、前後二十七回に及ぶ連載記事にして『晨報』へ送付していたのである⁽⁶⁾。その記事の評判の良かったことは、晨報社から「晨報叢書」の第九種として単行される予定であったことからも知れる⁽⁷⁾。更に瞿秋白は、「社会改造の中心問題は、経済組織の整頓にあり、古きをくつがえし、新しきを創造することにある」⁽⁸⁾として、具体的な施策に関する記事を七本書き送ってもいたのである⁽⁹⁾。

一方、『赤都心史』では、新経済政策自身を取りあげなかったかわりに、それを受けとめ生活してゆく側の人々の姿に筆墨が費されていたのであった。数年来なかった復活祭の賑やかさ、コーヒー店に出入りする「新妓女」、そして通りに物資を並べて商う人々の山……。

同様のことは、5月1日に復活祭とメーデーが重なった際に書かれた『赤都心史』と『晨報』との文章を比較してみても知れることである。

『赤都心史』には、復活祭を楽しむモスクワの人々の姿がうつされ、女性の友人を訪ねて祭りの食事に招待される瞿秋白の姿まであらわれるが、話柄はそのまま市場の開放によりもたらされた生活の豊かさへとつながってゆく。一方の『晨報』の通信では、復活祭よりロシア人の宗教性が文化の後進性の因として強調され、メーデーの描写においては、赤の広場でのカーリーニンの演説から、花車や音楽会まで、その雰囲気沸く人々の姿をとらえようとする姿勢が感じられるのである⁽¹⁰⁾。

今少し『赤都心史』に眼を移せば、例えば、教育人民委員会の女性職員が、瞿秋白に書籍を届けに来た時のことが記されている。瞿秋白のもとに偶然白パンがあったため、それで彼女をもてなした所が、彼女は一つを食べ、もう一つを母親に持ち帰るといふ。というのも「わたしたち幾年もこんなパンを

食べたことがないんですもの」というのである。また、俞頌華が「共産主義の家庭はどうか？」と尋ねた所、笑って「コロンタイ女史は、著書の中で家庭生活の社会化を説いていますけれど——わたしたちはまだそこまで思いもよらないんです」と答える。政治とは直接にかかわりなく、日々生活に追われている人々の変わらぬ生活態度を革命のモスクワの生活の一コマとして紹介したことに、瞿秋白の意図はうかがえよう。

また、ある章では、瞿秋白の友人であるロシア人郭質生 (B.C. Колоколв) の語ってきかせた話として、ある共産党員の親戚がコーヒー店を開き女給を雇うのに、友人にこう話したということが記されている。

「——毎月十五万ルーブル、毎日働くのは二時間、……へッ……へッ、チップは『コーヒー店で』好きに稼げるさ、……ができりゃあね、気をつけておいて下さいよ」⁽¹¹⁾

続けて、女性の役人が、昼からおめかしをしてコーヒー店の女給に働きに出るといふことも語られている。

郭質生は、無論こうした新経済政策の「流弊」⁽¹²⁾に憤慨の言葉を洩らさずにはおれなかったのであるが、瞿秋白はその言葉に「あまりにもきびしい言い方だ、あまりにも……、少し辛辣に過ぎるだろう」と感じるのである。

瞿秋白もブルジョア文化への不信、嫌悪を表明する点において郭質生に劣らない。ロシア未曾有の大饑饉への義捐金を出ししぶる「成金」^{ネツプ・マン}たちに対して、怒りにも近い憎悪の情を書きつけている。だが、新経済政策によって「大多数の勤労人民も多くの方便と利益を受けている」眼前の事実を、革命の理念が「人間化」される際伴う摩擦抵抗力とも言うべき反動への対応として瞿秋白は理解していたのであり、郭質生のいうように安易な現実との妥協とはみなしていなかった。瞿秋白にとって、「流弊」なき「人間化」などあり得ぬことは言うまでもなく、「流弊」が「世間の不平等性」のあらわれである以上、「永存不滅」のものであることもわかっていた。だが、瞿秋白は、その「流弊」に真顔で憤慨する「非政治主義者」のいることも、「社会の実際生活」の中に記しておきたかったのである。

他方、瞿秋白は、『晨报』に「ロシア革命史は非常によい参考書だ」⁽¹³⁾という中国人へのアピールを記していたし、「彼ら共産党の精神は非常によい、惜しむらくは、これを全国国民に較べるに、人数があまりに少なく、人材にあまりに欠けるということだ」⁽¹⁴⁾とも述べていたのである。瞿秋白が『晨报』に寄せた文章には、「通信」としての性格を越えた煽動的言辞が織り込

まれていた。政治を語るにも、『赤都心史』の生活の衣を一枚纏った描きぶりとは好対照だと言わねばならない。

即ち、多角的にソヴェト・ロシアを捉えようとしていた瞿秋白の姿勢は、『餓郷紀程』の「理智の研究は科学的社会主義に重きを置き、性霊の栄養は神秘的『ロシア』に融けこむと敢て言おう」⁽¹⁵⁾ という語からもうかがえるし、事実、それらの成果として、『ロシア革命史』や『ロシア文学史』⁽¹⁶⁾も産まれていた。だが、それらの多角的理解を通した一つの全体像が浮かんでこなければ、「社会の魂」をつかみとることはできないはずである。瞿秋白が自らの感受性によって心中に構成しつつあったモスクワ像は、生活へ向かう『赤都心史』と理念へ向かう『晨报』との両極へ引き裂かれまいとする努力によって、何とか焦点のぼやけた像を結んでいたのであった。

その努力とは、『赤都心史』がそのままの姿で理念に近づくということであった。その典型的な例が、コミンテルン第三回大会についての文章である。

瞿秋白は、その大会の席上で、レーニンの演説を聞いている。語り口の「沈着果断」な様、毫も大学教授の如き素振りをみせず、「誠実で毅然とした政治家の態度が自然のうちに顕れている」ことに、瞿秋白は深い感銘を受けたのであった。演説するレーニンの姿が、赤旗や標語の上にうつり映える様に、瞿秋白の胸中には、「一つの新奇な感想、特異な象徴」としてレーニン像が築かれつつあった。

のちに瞿秋白は羊牧之にこう告げている。

「……、しかしロシアでの数年の現実生活の中で、特にコミンテルン第三回大会に参加し、レーニンの報告を幾度か耳にしてから、私は次第とマルクス主義を受け入れていった。」⁽¹⁷⁾

この言葉には、「政治生活のモスクワは、この度初めて私に深い感想を与えてくれた」という瞿秋白の呟きと合わせて、心中の伏流のいくばくかは流露されていると受けとってさしつかえあるまい。勿論、瞿秋白がレーニンの演説や沸きかえるような掌声の感化を受けて、すぐさまマルクス主義の信徒になったというのではない。五四運動以来、心中に培ってきた「無階級、無政府、無国家の最も自由な社会」への幻想を「人間化」するための具体的手段としてマルクス主義が最も有効であるという確信を革命のモスクワでの生活体験を経て再確認したということであろう。その「共産党の精神」の象徴的存在としてレーニンはあったものと思われる。

だが、逆に言えば、「この度初めて」の語が端なくも告げているように、

それまでの瞿秋白は、ソヴェト・ロシアの政治生活に多く触れながらも、それらによって、自身を内面の奥深くから突き動かすような衝撃を受けたことがなかったということである。「社会の実際生活」に属する内容が『赤都心史』の前半に多いのは、単なる紹介的意図が働いたがゆえではあるまい。ぼやけたモスクワ像の焦点を合わせようとの彼の心理が、自然とその方面の題材を多く選ばせていたのである。そこに、「際立った『個性』の通俗に対する抗議の声」⁽¹⁸⁾としてのレー尔蒙トフの詩篇がさしはさまれていることも、極めて象徴的に瞿秋白の「煩悶」を伝えていたと言えよう。

さて、瞿秋白は、モスクワでの味わったこともなかった厳寒に、過労と食糧不足が重なり、胸の患いも着実に進行していた。

ついに七月、瞿秋白は丸ひと月の間、病臥に伏す。

左の肺が一段と悪化していた。ひと月休んでも咯血は収まらなかった。外気にあたって体を動かすと気分が悪くなる。医師に帰国を勧められたのも、無理のない話であった。

病床での退屈な時間をやりすごしながら、瞿秋白の視線は、自然と自己の内側へと向かわざるを得なかった。

そこで瞿秋白に見えてきたのは、自己の無力さである。

「魂兮归来哀江南 魂よ帰り来たれ江南は哀し」⁽¹⁹⁾

『楚辞』の一句を借りて吐露された瞿秋白の心理とは、「私の個性を返せ、私の社会に服務するための精力を返せ！」という焦燥感、自己の無力さへのやりきれなさである。江南の夢影を胸に浮かべつつ、故郷へのいとおしみの情が、一層病床にある自己の無為を際立たせてしまうのである。

さすがの瞿秋白も病魔には勝てず、やむを得ず帰国を決意する。俞頌華への手紙に、四ヶ条ほど帰国に至る理由をあげているが、最後に筆先より溢れ出てくるのは、やはり、自己の無力さであった。

「私の如き学識に乏しく精神の疲弊した者が、天地開闢以来初めてのロシア文化の研究(私より早い留学生に良い文章を書いた者がいるかどうか)の事業に携わり、何とかこれっぽっちの成果を絞り出したのですが、最大限にまで尽したと言えるかどうか?……」⁽²⁰⁾

瞿秋白の自負と責任感の強さが、すっかり裏返されて自身の心を穿ったのであった。

しかし、幸か不幸か、瞿秋白のまとめた荷物は重すぎ、交通の便も悪く、帰国の機会をうかがううちに、病状はいくらか快方に向かうのである。瞿秋

白は、徐々に回復しつつあった体力を頼りに、今一度モスクワに留まることを決意し、東方労働者共産主義大学（以下、東方大学と略）の中国班で、ロシア語を教授するかたわら、政治理論課の通訳としても活躍することになった。

十月の中旬には、トルストイの生家、ヤースナヤ・ポリャーナ（清田村）への小旅行を楽しんだりもしている。牧歌的な農村風景に心洗われた瞿秋白の思いは、すっかり無力感からは解放され、「生活の理解は遠くはないかのようだった……」という地点にまで、自己を充実させていた。

だが、十二月も半ばにさしかかった頃、瞿秋白の肺病はぶり返す。「経済的に相当余裕があった」⁽²¹⁾ というが、新経済政策の市場開放により、曾て受けていた優待食糧はなくなり、却って物質的苦しさは増し、東方大学での通訳の仕事も重く肩にのしかかっていた。知識労働が「更に無制限に増加した」ため、疲れで顔面を蒼白にし、教壇で息さえつげぬ事もあったという⁽²²⁾。瞿秋白は、モスクワ郊外の高山療養院へと担ぎこまれた。

この度の病状は相当に重かった。医師からは、せいぜい二、三年持ちこたえるのが限度だと宣言される。しかし、瞿秋白は七月に倒れた時と同様、病床にあっても仕事を手放そうとはしなかった。「彼は病魔の手から、一分であれ、仕事の可能性を奪い返していたのだ」⁽²³⁾ という曹靖華の思い出は、よく彼を見舞っていた友人にして持ち得た実感であったろう。

瞿秋白は、雪に包まれた静かな病室に身を横たえたまま、肉体の病いより精神の病いへと、意識を心の内面深くすべり込ませてゆく。そこで、彼の眼前にあらわれてきたのは、浪漫派と現実派とに引き裂かれたまま、繕うすべもなく、今に至った彼自身の心であった。

「私は生まれながらの浪漫派、いつも枠を飛び越え、猪突猛進、驚愕と感涙の奇跡のあらんことを思ってきた。情の動きは、限りなし、限りなし。しかし、私は幼時から現実派に傾く意識もまた根強く、『いつも』地に足をつけ、しっかりと実地に行ない明察『しなければならず』、現実の生活を見、一つ一つきちんと事を済まさねば気がすまない。理智の力によって、強行裁決してきたのである。」⁽²⁴⁾

瞿秋白が「心と智の不調和」と記しているこの心のみぞこそ、多角的理解の裏にひそむばやけたモスクワ像を産む原因だったのであり、さらに遡って、「余計者」意識への否定欲も、「理智」による「強行裁決」の形を変えた姿に外ならなかったのである。

『赤都心史』の後半にかたまる「冥想感得」に属する部分は、まず「浪漫派」の「杵を飛び越え」んとする章があらわれ、次に「現実派」の「強行裁決」の章が続き心の揺れを押しもどすという流れが繰り返されている。瞿秋白の心の疲れが、痛々しくも響いてくる箇所である。

例えば、瞿秋白は、二弟雲白からの手紙に触発されて、再び「幾年も前から私の脳裡にまとわりついていた」「何故『家』がいるのか？ 私の家は何のために存在しているのか？」の沈思黙考にひきずり込まれてしまう。

瞿秋白にとって、「家」とは「すでにあらゆる必要な形式を失い、僅かに精神的繋りを残すのみ」の形骸にすぎなかった。しかし、形骸であれ、それをいとおしむ気持ちがあればこそその沈思である。「士」の階級という「最も奇型化した社会的地位」⁽²⁵⁾ ゆえに、歴史のクレバスにはまりこみ正に「余計者」となってしまった自身の父親に対する思いもこめて、瞿秋白は「きっとその日が来るだろう、『士』が残らずプロレタリア化する日が。その時、私たちは私たちのなし得ることをなすのだ！」という切なる叫びをあげたのであった。

次の章に移れば、その心の動揺を鎮めるかのように、静やかな個性への探求が始まるのである。

瞿秋白は個性のあり様を三通りに示し、その中から、心と智の調和のとれた「人類の新文化の胚胎」たる個性を求めるのである。「『我れ』は旧時代の孝行息子ではなく、『新時代』の活潑な若者なのだ」という自己認識や「世界の文化運動の先鋒隊に編入された」小兵としての自覚などに、「士」がプロレタリア化する夢への「理智」のかけ橋を見てとることができるであろう。

続く章でも、「現実派」の心が年老いた白猫に化け、「浪漫派」の心に対して、生活の意義もわからずに「少しでも余計に取ろう」としているにすぎぬ愚かさを「強行裁決」してしまうのである。

しかし、瞿秋白の「浪漫派」の心の進りもとどめ得ない。

「私は『心』が欲しい！ 私は感覚が欲しい！ 私は泣きたい、泣き叫びたい、思いのたけ…… また心ゆくまで私の現実生活を切実に感受することだ」⁽²⁶⁾

が、また、心の異常な昂ぶりを押しとどめるように、単なる「心」や感覚の突出を個性の高慢として斥けるのである。

翌1922年の1月末、イルクーツクで開催予定だった極東各国共産党及び民

族革命団体第一回大会がモスクワに会場を移して開かれることになった⁽²⁷⁾。中国代表には、張国燾、張秋白等、社会主義青年団を代表して張太雷も出席していた。瞿秋白も、この大会に参加すべく高山療養院を離れた。瞿秋白の躍り上がらんばかりの喜びようは、夏の朝まだき、高山より朝霞を見はるかす仮空の情景によくあらわれている。

「……，極東を望めば，赤紫の光の焰がますます明るく雲間に輝き，洪大にも天際より射し込んできた。あかあかと燃えさかり，光の輪がごうごうと旋回する——あっ！ 朝霞だ，朝霞だ！」⁽²⁸⁾

瞿秋白が張太雷の紹介を経て，中国共産党に入党したのは，この後まもなくのことであった⁽²⁹⁾。瞿秋白は，「人類の新文化の胚胎」として活躍できることに，「心と智の不調和」を成算し得る大いなる可能性を見い出していたに違いない。

閉会式は，ペトログラードで開かれた。しかし，療養院を出たばかりの体には，ペトログラードの気候は厳しすぎたようだ。二月七日，瞿秋白は意識を失ったまま，モスクワの高山療養院に連れ戻された。瞿秋白の病床吟「^{ロシア}俄の雪」⁽³⁰⁾は，誠によく当時の心情をうつし得ていると思う。

^{ロシア}
俄の雪

い^{あめつち}だくすべなき寰区の
白き絹垣あまねくまとい，
万物をはらむ宇宙に
白茫茫たる一望の奇夢残さる。

^{ロシア} 俄の雪，^{ロシア} 俄の雪，
^{ナポレオン} 拿破侖天裂く凍えに耐え切れず。

静寂，静寂，
恰も大陸を沈めるごと，濛々たり。

鳥の声地の底ひにひそみ
緑のしるし凝りて動かず
見よ！ 見よ，人と自然とを塞げるは，
かの暗雲の四面を繞り寒気の湧きくるのみなるを。

瞿秋白にとって、ロシアの雪は、『我れ』と自然との水魚の交わりを堅く阻む障害物であり、自己の可能性まで押えつげんとする「冷淡なる主人」であったのである。

これより以前の章において、瞿秋白は、櫓に乗って坂を下る際、無理な姿勢になりつつ、身体の均勢を保つことで「私は外界の自然を大いに克服することができるのだ」と思うことに対して、無理な姿勢での自然の克服をいつまでも続けることはできぬと述べているのであるが、この言葉より、「理智」の「強行裁決」に対する自己の不満をうかがうことができる。

また、続けて「我れ」と「非我」との合一を説く瞿秋白は、その両者を結び合わせるものとして「愛」を想定した。このことから、「我れ」に対立する「非我」を、同じく「我れ」の対立物である自然として理解することも可能となろう。

とすると、今回の瞿秋白は、「強行裁決」に代わるものとして「愛」による「浪漫派」と「現実派」の橋渡しを求めていたことになる。瞿秋白のいう「愛」は、トルストイからの影響を抜きにして考えられぬが、トルストイのそれは、人間が天職を全うすることに対する「愛」であった。瞿秋白は自己の天職を早くから「皆のために光明の道を切り拓く」ことに思い定めていたのである以上、即ち「共産党の精神」の「人間化」を天職として引き受けることへの「愛」だと言ってよいだろう。前述したように、瞿秋白の入党時期がちょうどこれらの文章の執筆時期に重なることや、「本当に赤色のロシアに身を浸してこそ、現実の世界の湧き来るのが見えるのだ」という言葉に連なる心理として、瞿秋白の心の動きを理解することは、決して難しくないだろう。

が、それも、理不尽な「ロシアの雪」によって、有無を言わずに抑えつけられてしまった。瞿秋白の落胆は大きく、「ロシアの雪」への怨みも深かった。

それ故にこそ、「自然を崇拜し、一切の人工は全て価値なく奴隷性をもち、自然が人生と融合しあわなければならない」と考えた詩人チュッチェフに対する瞿秋白の愛着も、身に泌みて深いものがあったと言わねばならない。瞿秋白が詩人に注釈を施したのは、このチュッチェフ一人に対してだけであった。

また、高山療養院の「医師独裁制」の禁を破った堯子河ヤウザーへの一遊も、「心史」に留むべき一章たり得たほどに、瞿秋白の心は疲弊していたのである。

そこで瞿秋白は、再び冷静なる「理智」でもって、1911年以来の中国思想界の変遷をたどりつつ、現代青年の欠陥を指摘し、公式では割り切れぬ「現実生活」理解の重要性を説くのである。ここで、瞿秋白は、恰も自己の思索の「最後の底稿」を書きつけるがごとき勢いで、議論を繰り広げている。その結論部分を見ておこう。

「凡そ現実的なものは皆活着しているものであり、凡そ活着しているものは皆現実的なものである。新文化の動的な^{ダイナミック}工作が、純粹に現実の世界に存在する限り、現実世界中の工作者も全て生活の中にあり、全て活きた人間なのである。」⁽³¹⁾

「活きた人間」こそ、「理智」に「浪漫派」の心の通った人間であろう。「必ずや人生の『夢』の中に、現実世界をあらわさねばならぬ」という語にも、同じ思いがこめられている。自己の天職への「愛」による「浪漫派」の心の中に萌芽する「理智」の生長から、瞿秋白は「強行裁決」など必要とせぬ心の統一された高み、安らぎを想定していたのである。

だが、瞿秋白が真に「活きた人間」となってモスクワで活躍していたのかどうかは、不明である。これ以降の瞿秋白の「政治的動物」⁽³²⁾としての活躍ぶりが、彼に自己の心を極限にまで問いつめる余裕を与えなかったことは、むしろ幸福であったかも知れないのである。

しかしながら、瞿秋白は、オーウェルのいうように、「自分の政治的立場についての自覚が深まれば、それだけ、政治的に動いても美や知性にかかわる誠実さを犠牲にしないですむようになるのである」⁽³³⁾という言葉通り、「浪漫派」と「現実派」との見事な協調の上に築かれた豊穰なる心の現実への誠実なる返答として、「政治的動物」でありつづけた可能性も捨て切れないのである。

今ここで、意識の上の紙一重の差で、どちらへも転びかねない心の真実を、敢てそのどちらか一方に決してしまう必要はあるまい。恐らくは、そのどちらでもあったのだ。瞿秋白という没落士大夫階級出身の青年が、遙かに資本主義を飛び越えて社会主義の祖国へとその魂を飛翔させた時、因襲の重みにぱっくりと空いた心の裂け目に悩み苦しむ、その克復のため全精力を使い果たした姿が、この『赤都心史』には刻みつけられているという事実を確認すれば、それで充分なのである。いずれにしろ、『赤都心史』を通り抜けた瞿秋白が、「知識階級は、結局は社会の喉にすぎぬ、いかにあれ、主体とはなり得ぬのである」というキッパリとした態度で、自己の選りとった道を振り

かえりもせずにしたすたと歩み続けていったことだけは、疑いのない事実なのである。

3

旅先において人の発見するものが自己と等身大の価値である如く、瞿秋白がモスクワより汲み取った甘露も、彼自身の思索と体験とを余す所なく吸いあげ育った果実に外ならなかった。読者が『赤都心史』を読みつつ、赤都モスクワの与える印象よりも、瞿秋白自身の印象に強く打たれるのも、もっともなことなのである。瞿秋白の筆使いが、しばしば、自己を語る際により熱っぽさを加えるのも必然の成り行きだった。

しかしながら、そこに語られている自己には、瞿秋白というプリズムを通したモスクワの息吹が、やはり鮮明に顔をのぞかせていることも忘れてはならないだろう。

故にこそ、当時、瞿秋白の『餓郷紀程』と『赤都心史』によってソヴェト・ロシアを知った茅盾は、両書によって瞿秋白という人物を知り得たばかりか、両書がソヴェト・ロシアに極楽世界を夢みていた人々の幻想を「醒めたリアリズム」で打ち破ったのだとも回想しているのである⁽³⁴⁾。

更に、この合わせて三百頁に垂んとする両書が、質量の両面からいって、五四新文化運動の一翼を担った新文学運動における最も重要な成果の一つであることも間違いのない所だろう⁽³⁵⁾。新文学草創期には、詩集や短編小説集は多くあらわれたが、まとまった長編となると寥々たるものであった。せいぜい、王統照の『一葉』(1923年)、『黄昏』(1925年)、或いは楊振声『玉君』(1925年)、張聞天『旅途』(1925年) くらいのものである⁽³⁶⁾。葉聖陶や茅盾、更に巴金や老舎等の登場により漸く新文学にも長編小説が根を下ろすのは、1928年以降のことであった。

かく考えてみると、瞿秋白の両書の登場の持つ意味は、今更ながらに大きかったと言わざるを得ない。瞿秋白の両書は、当時の文学作品の多くがそうであったように、彼自身の人生探索の書としての性格を備え、「五四」という時代の産んだ、そしてその歴史的経験に真向から立ちむかい、その時代精神を熱く筆尖より進らせた作品として評価されるべきであろう。瞿秋白自身が下した「幼稚な文学習作」との定義も、王統照の「熱あり光ある永遠に若き修飾を必要とせぬ立派な散文」⁽³⁷⁾との評も、その意味で、諾われてしかるべきだと言えよう。

『赤都心史』は、『新俄国遊記』（『餓郷紀程』を改題）と同じく、商務印書館より「文学研究会叢書」の一冊として出版された。1924年6月のことである。鄭振鐸が叢書に編入したという⁽³⁸⁾。

だが、出版後まもなく、まず『赤都心史』が発禁となった。そのあと追いかのように、『新俄国遊記』も絶版となる。かくして、瞿秋白の「赤味を帯びた黒い霞の影」は、「黄昏近き夕陽」によってかき消されてしまったのである。歴史の「遅緩律」⁽³⁹⁾は、ここにも生きていた。

(注)

- (1) 『心的声音』における「緒言」、『餓郷紀程』における「緒言」など。尚、『赤都心史』のテキストは、『瞿秋白文集(一)』人民文学出版社1953所収のものを使用した。
- (2) 商務印書館より「世界叢書」の一冊として、発行予定であったが、政府の許可がおりず、1932年の上海事変の際、日本軍の爆撃により商務印書館もろとも灰燼に帰した。尚、そのうちの一篇である「世界社会運動中共産主義派之発展史」は、『新青年』季刊第一期（1923年6月）に発表されている。
- (3) 『瞿秋白文集(一)』所収のテキストは全46章立てであるが、原書は全49章立てである。詳しくは、丁景唐、文操合編『瞿秋白著訳系年目録』上海人民出版社1959第69～71頁参照。尚、『文集(一)』所収時に削除された三章については、上海図書館蔵の原書のコピーをテキストとして使用した。
- (4) 『文集(一)』第99～100頁
- (5) 同上第5頁
- (6) 周永祥編写『瞿秋白年譜』広東人民出版社1983第20頁
- (7) 『晨報』所載の「晨報社叢書」広告(1922年10月)には「印刷中」として見えるが、上海図書館編『中国近代現代叢書目録』商務印書館香港分館1980の「晨報叢書」の項目(第848～849頁)には、見えない。
- (8) 「俄羅斯之經濟問題」(『晨報』1921年9月27日)
- (9) 前出『瞿秋白著訳系年目録』第8頁
- (10) 「莫斯科之耶蘇復活節及五一節」(『晨報』1921年8月24、25日)
- (11) 『赤都心史』商務印書館1924第59頁
- (12) 「共産主義之人間化 民族問題」(『晨報』1921年6月29日)
- (13) 「共産主義之人間化 小結」(『晨報』1921年9月23日)
- (14) 「莫斯科之耶蘇復活節及五一節」(『晨報』1921年8月25日)
- (15) 『文集(一)』第88頁
- (16) 「十月革命前的俄羅斯文学」と改題されて『文集(二)』所収。蔣光慈の刪改を経たものである。

- (17) 羊牧之「我所知道的瞿秋白」(『憶秋白』人民文学出版社1981所収)
- (18) 『文集(二)』第487頁
- (19) 『文集(一)』第129頁, 「第18章南国」の副題である。
- (20) 『文集(一)』第139頁
- (21) 王鴻勛「偉大十月的洗礼」(『紅旗飄飄』第4集1957所収)
- (22), (23) 曹靖華「点滴憶秋白」(『文芸報』1955年第11号)
- (24) 『文集(一)』第170頁
- (25) 『文集(一)』第13頁
- (26) 『文集(一)』第172頁
- (27) 張国燾『我的回憶』第四編 明報月刊社1971参照
- (28) 『文集(一)』第178頁
- (29) 瞿秋白自身の編んだ「記憶中的日期」(前出『瞿秋白年譜』所収)に依れば, 1921年5月に張太雷の紹介で入党し, 9月に東方大学での通訳を始めた時に正式に入党したというが, 信頼は置けない。『瞿秋白年譜』や「張太雷年譜」(『張太雷文集』人民出版社1981所収)のいう1922年2月入党説の方を採っておきたい。
- (30) 『文集(一)』第182~183頁
- (31) 『文集(一)』第195頁
- (32) 「多余的話」
- (33) ジョージ・オーウェル「なぜ書くか」(『オーウェル評論集』岩波文庫1982所収)
- (34) 茅盾「紀念秋白同志, 學習秋白同志」(『人民日報』1955年6月18日)
- (35) 増田渉「瞿秋白の『餓郷紀程』」(『中国文学史研究——「文学革命」とその前夜の人々——』岩波書店1977所収)に同様の指摘がある。
- (36) 『中国新文学大系第十集 史料索引』上海文芸出版社1981影印本所収の「創作編目」に依った。
- (37) 王統照「恰恰是三十個年頭了」(前出『憶秋白』所収)
- (38) 鄭振鐸「記瞿秋白同志早年的二三事」(前出『憶秋白』所収)
- (39) 『文集(一)』第12頁